

# 年鑑 ナイフマガジン 2017 春夏

Knife Magazine 2017 Spring & Summer

C o n t e n t s

Topics 002

SHOT SHOW in LAS VEGAS 010

現役 SWAT 隊員とのコラボモデル登場！

松田菊男「サザンクロス」 020

KIKU “Southern Cross”

US最新フォールダー事情 030

The Latest Folding Knives in US

JKGナイフショー & JKGナイフコンテスト 038

JKG Knife Show & Knife Contest 2016

銀座ブレードショー2016夏 & 2017冬 050

ナイフショッパー推し「はじめてのナイフ」 058

USN G8 064

USN ギャザリング

カスタムナイフメーカー

福田正利 Masatoshi Fukuda 070

高本龍雄ナイフキット“ウタリ” 076

Tatsuo Takamoto's Knife Kit “UTARI”

大工道具のかたち「装飾と本質」 082

●土田昇/秋山実

ナイフメイキング講座 リバイバル版 113

How To Make Knives

プロに学ぶ「ベルトグラインダー」によるナイフ・メイキング 115

相田義人のベーシックナイフパターン 125

ナイフショッパーおすすめのメイキング・グッズ 129

ヤスリで作るナイフ・メイキング シースナイフ編 135

ヤスリで作るナイフ・メイキング フォールディングナイフ編 150

ハンドル材カタログ 161

はたらく刃物「当世家具屋事情」 170

ハンターとハンティングナイフ 074

インフォメーション 080

おくづけ 176

●中條高明

●表紙写真：ヒロソガ 表紙デザイン：須田恭介（マブチデザインオフィス）

# SPYDERCO

まずチェックしたいのはスパイダルコ。ワンハンドでブレイドが自在に開閉できる、画期的な実用性を発揮するスパイダーホール。これをベースに提案とチャレンジを欠かさず、いつも新たな切り口を見せてくれる。実用である事を最優先にしながら愛嬌あるナイフ達。ナイフ界を牽引する実力メーカーだ。



スパイダルコ社の広報、ジョイス女史から、新製品について話しを伺う。カタログだけでは解り難い、機能性や開発裏話が聞けるのは、取材の直コンタクトならではの。



## Introvert

特徴的なスパイダーホールの他に穴がもうひとつ! 独特の形状が目玉なのは“インターヴァード”。輪に人差し指を挿入すればしっかり握れ、ナイフを手放すこと無く物が掴める。これまでに無かった実用性を発揮。マーシャルアーティスト、クリス・ナトソンのアイデアをスパイダルコ社がナイフにした。



閉じた状態がまた個性的! タングにリングが設けられていて、この部分がフリップパーとして機能する。優れた機能性を発揮するユニークなデザイン。



遠くからでもひと目で判るスパイダルコブース。豊富な製品が綺麗にディスプレイされている。



## Lightweight“Zone Green”

### Endura 4(上) & Dragonfly(下)

スパイダルコ社のロングセラー定番モデル2機種に、「ライトウェイト・ゾーングリーン」モデルが新登場。人気の定番モデルも改良を加え、性能をアップさせる。進化を忘れないナイフメーカー。それがスパイダルコだ。



## SpydieChef

“スパイディーシェフ”という名のとおり、キッチンナイフの機能性をフォルダーに込めた最新作。同社のソルトシリーズでお馴染みの錆びない鋼材H-1と同様に、錆びないLC200Nをブレイドに使用。チタン製のハンドルで軽量のキッチンナイフ。



ショットショウは米ラスベガスで開催される武器見本市。世界中から約1200社が出展。さらに今年には米陸軍の次期制式採用拳銃が会期中に発表されるなど、世界最大級かつ注目度の高いショウだ。そんな場所では「ナイフ!?!」と思ふことなかれ。射撃競技やハンティング、そしてミリタリーやボリスなどのタクティカル分野まで、ナイフは欠かせないアイテム。ガンとナイフは強力な相互関係で結ばれている事は、今さら説明するまでもない。会場には各種のナイフが世界中から大集結。ナイフ業界のトレンドを探った。

# SHOT SHOW 2017 In Las Vegas

●文・写真：長谷川朋之  
Text & Photos: Tomo Hasegawa

ジェイソン・デイヴィス氏は、アーケディアPD(ポリスデパートメント)のオフィサーとして勤務17年、ファイアアームス(小火器)インストラクター、アーマラー(火器取扱者)、SWATチームスナイパーを務めるサージェント(巡査部長)である。彼は、全米に7人しかいないコルト社のアーマラーでもあり、全米に出張してコルト製品のデモンストレーションもしている。そんな仕事の関係上、彼の元には第一線の銃器やタクティカルギアが送られてくる。彼に使用してもらって、プロとしてのインプレッションをメディアで流すのである。

ある日、ジェイソンから連絡をもらった。

「ヒロ！ キクサンはセイリエントアームズに限定モデルのナイフを作ったのかい？ あれはいね。大き過ぎずジャストサイズで刃厚もばっちり堅牢。なのに物凄くシャープな切れ味だ。あれは手に入るのかい？」

セイリエントアームズというのは、ゲロック・ピストルのカスタムで一躍有名になった会社。ジェイソンも結構な数のセイリエントカスタムを所有し、社長とも友人なのだ。どうもガンをピックアッププしに行つて、社長に「キク(松田菊男)&セイリエント・コラボナイフ」を見せびらかされて帰ってきたらしい。ごく少量の限定生産だったので、セイリエントでも完売してしまっている。

あまりにも悔しがっているので、そのモデルよりひと回り小さい「Shinobi(忍)」という一般モデルがあることを教えてあげた。

実はジェイソン、かなりナイフにはうるさい男なのだ。

以前コレクションの一部を見せてもらったことがあるが、フォールダーからライクストブレード(シースナイフ)まで、その世界ではうるさい型の作者によるカスタムナイフが揃っていた。彼は基本的にフィクストブレードが好きなので、鍛造タマスカスからD2鋼材、S35VN鋼材のものまで、結構な種類を揃えていた。印象的だったのは、どれも結構使い込まれていたことだ。あるタマスカスブレイドなど刃先が湾曲して刃切れを起こしていた。とことん使うタイプなのだ。

「ハイ、ヒロ！ シノビを手に入れたぞ。これもいいな。このサイズならどこでも持っていけるし、ベルトに吊つても、プレートキャリアに付けても邪魔にならない。小さいせに頑丈で、切れ味も抜群だ。OU-31ってのは、どういう鋼材なんだい？」

取材でジェイソンに手伝ってもらった際のつけからキクナイフの話になった。早速「忍」を手に入れて、使い倒しているよつなのだ。

「このモデルが素晴らしいのは、やはり常に持っていられるこのサイズだな。ツールは『そのときその場』にあることが一番重要なんだ。いくら素晴らしいツールを持っていても、いざというときに手元に無ければハナシにならないからね。」

●Text & Photos:Hiro Soga  
●商品問い合わせ:KIKUナイフズTEL058-229-6564

現役SWAT隊員とのコラボモデル登場！

# 松田菊男

## 「サザンクロス」

鋼のマスター松田菊男氏と、SWAT (米警察特殊部隊) チームリーダーのJason Davis (ジェイソン・デイヴィス) 氏がコラボレーションナイフを完成した。デザインコンセプトは「オフィサーがオン&オフ・デューティーで使い倒せるツール」だ。

KIKU “Southern Cross”  
KIKU “Southern Cross”

# Todd Rexford

タッド・レックスフォード



ピボットヘッドやスパーサーにもダマスカスが使われている

## GAMMA Framelock

### ガンマ・フレームロック

ブレイド長3.5インチ、全長8.125インチ、ハンドル材ホットハンマードチタン、ブレイド材チャッド・ニコルズ作S35VNコア"Sanmai"ブレイド。

今や、フォールディングナイフ界のスーパースターともいえるのが、レックスフォード氏である。ハンドメイドフォルダーは、常にトッププライスを付け、オークションの華となっている。デザイナーとしても、ZTやボーカー社とのコラボレーションで知られている。

「切る」という第一義を持ちながら、個体によってその性能に明らかな違いがあり、使う楽しさだけでなく、持つ喜びからコレクションにも耐えうるという貴重な存在だ。価格的にも、下は数十ドルから、上は数万ドル以上まであり、ステップアップすることによって投資的な側面さえも持っている。

そう、アメリカのナイフマーケット、特にカスタムフォルダーの世界は、この不況下でも確実に売れているのだ。日本では、この「タクティカルフォルダー」という分野に抵抗があり、今ひとつ人気が出ないというの、これまでの経験でおぼろげながらも分かっていた。要は土壌が違うのだから、それは素直に受け入れるしかないというのによく理解できる。そもそも日本ではポケットキャリアが実質的に法律で禁止されており、いくら素晴らしい機能と美しいシェイプを持ったポケットクリップがお目見えしても、評価のしようが無いとも言える。

それにしても、皆さんは昨今の最新フォルダーを手にとったことがあったことがあるだろうか。

タクティカルフォルダーといえは、多分皆さんが想像するのは「戦うための堅牢な第一ファイトングツールではないだ

## 続伸する フォルダーマーケット

ナイフの魅力にとりつかれて、もう長い月日が経つ。

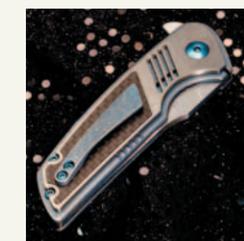
「切る」という第一義を持ちながら、個体によってその性能に明らかな違いがあり、使う楽しさだけでなく、持つ喜びからコレクションにも耐えうるという貴重な存在だ。価格的にも、下は数十ドルから、上は数万ドル以上まであり、ステップアップすることによって投資的な側面さえも持っている。



SAKO ROUCHANIAN

サコ・ロウチャニアン

全米の重要なナイフショーはもれなく押さえているというナイフパーヴェイヤー(Buy,Sell&Tradeをする人)であり、LA近郊にカスタムナイフを中心としたショップを持っている。ベンチメイド、ZTナイフ、クリス・リーヴといったファクトリーから、数万ドルするコレクター向けフォルダーまで、その守備範囲は広い。



このフリッパー部分が、ブレイドをオープンすると格納されてしまう。

## John Barker 「MINI HOKKAIDO」

### ジョン・バーカー作 「ミニホッカイドウ」

リー・ウィリアム氏とコラボレーションしたモデル。ウィリアム氏のキックストップ(フリッパーだが、フリッパー部分は、オープンすると格納してしまう)メカニズムを持っている。

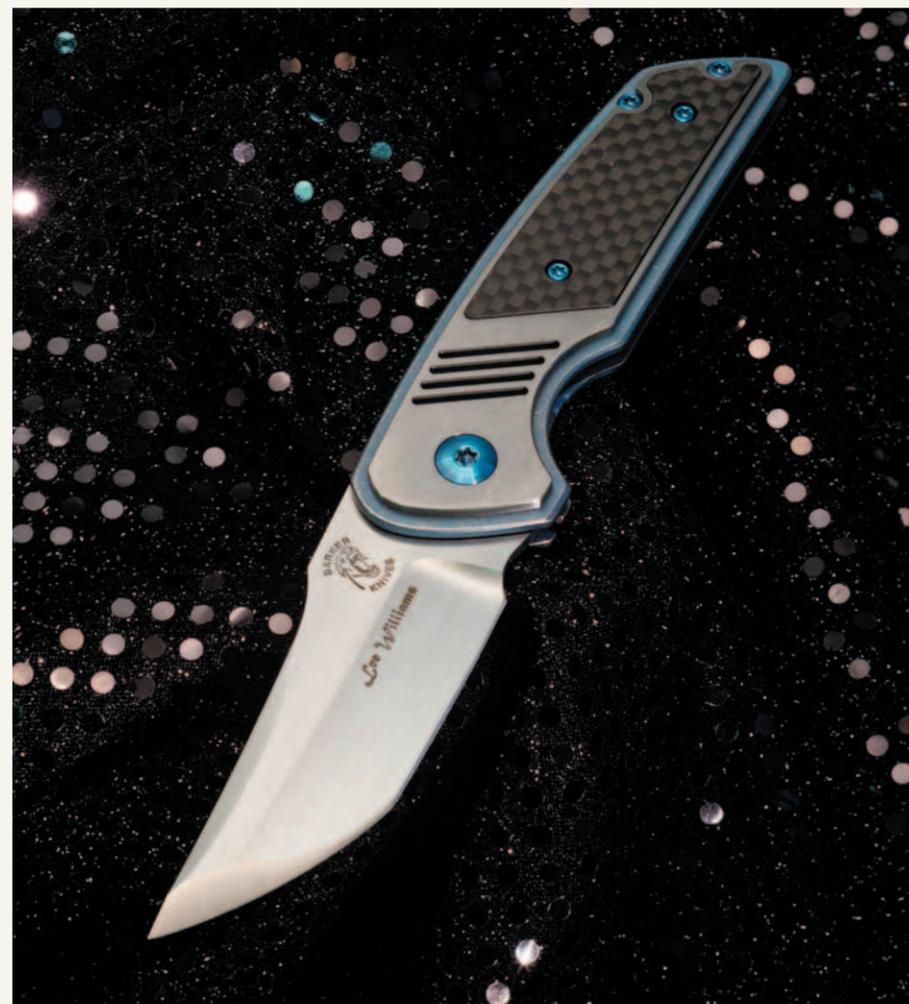
# The Latest Folding Knives in US

## US 最新フォルダー事情

世界最大のナイフマーケット、アメリカ合衆国。

そのマーケットの好調さは、不況がささやかれる経済状況の中でも、売れ続けているカスタムナイフが数多く存在することで証明されている。今回は、注目を浴びているフォールディングナイフを紹介すると共に、ナイフマーケット最前線にいるプロフェッショナルにその動向を聞いた。

文・写真：ヒロ・ソガ TEXT・PHOTOS:HIRO SOGA  
Cooperation: Sako Rouchanian <https://recon1.com/>



## プロに学ぶナイフ・メイキング ●ナイフ製作：相田義人

# ベルトグラインダー編

## ボルト位置の決定とケガキ

設計した通りのナイフを正確に作り上げることが、プロにとっての最低条件。

バーキングは、メイキング・ファンが憧れる、ナイフ・メイキング専用設計されたベルトグラインダー。高価な機械だが、ナイフを作るために必要な工夫が随所に活かされている。



あけた穴にファスニングボルトをセットして、マスターの外形を鋼材にマークする。ボルトをセットしておけば、ケガキの途中でバイスグリップが緩んでも、マスターと鋼材がズレ心配はない。



穴が貫通するとき、ドリルの回転方向に強い力がかかるので要注意。貫通する前、鋼材の裏が膨らんできた辺りから少しずつプレッシャーを弱めよう。



鋼材とマスターをしっかりと固定したら、マスターの穴位置に合わせてそれぞれの穴をあけてしまう。外形を整えてからでも穴はあけられるが、マスターを固定しなおす時のズレを防ぐために、この段階で穴をあける。



鋼材にブルー・インクを塗り、バイスグリップでしっかりとマスターを固定する。正確なナイフを製作するためには、正確なケガキが重要。設計どおりのナイフを作るための第一歩だ。



外形をマークしたら、鋼材をテーブルバイスに固定してテーパ加工用の穴に、タップで雌ネジを切る。鋼材が固定しやすい形のうちに、ネジを加工した方が安全だ。

プロのカスタム・ナイフメイカーは、ほとんどの場合、ナイフ・メイキング専用のベルトグラインダーで、ナイフを製作している。ここでは、相田義人さんの製作方法を基準に、その手順やポイントを紹介しようと思う。

プロのメイカーがナイフを製作する工程は、複雑で細かな作業が実に多く、その都度さまざまな機械類を駆使する。メイカー個々の習慣やテクニックにも特徴がある。ここで紹介する工程はそれらのほんの一部。決してすべてではないということをお忘れしないで欲しい。

## 「多くの楽しみがあるナイフ・メイキング」

# 相田義人 interview



1970年代半ばに、アメリカのカスタム・ナイフのメイカーR.W.ラブレスに師事。以来、アメリカン・スタイルの実用ナイフ、コレクション性を追求した作品など、多くのナイフを製作してきた日本のトップメイカー。現在も製作の手を休めることなく、工房で過ごす時間を楽しんでいる。

ナイフの楽しみ方には「作る、使う、集める」の3つがあるが、ナイフ・メイカーの私には当然、作るが一番の楽しみである。アメリカン・スタイルのナイフに出会い、それを作る事を仕事にして、すでに40年以上の月日が流れたが、未だに作る事への興味は尽きることがない。どんな物でそうだと思うが、自分では色々な難しさがある。素材、技術、手順。初めて作る人にとっては、すべてが「？」。日本で、カスタム・ナイフが普及し始めた1970年代には、メイキングに関する素材も、情報もほとんどない状態だった。

だが現在はそれらが身近に溢れている。素材や工具を扱うショップも多いので、最初はその必要ない工具や作り方について教えてもらおうというだろう。とにかく一本作って、その面白さを実感して欲しい。

「ストック&リムーブ」によるナイフ・メイキングの楽しさや面白さ、あるいは醍醐味は、何の変哲も無い一枚の鋼板を自分自身で加工し、少しずつナイフに完成させていくことにある。苦労して、一本のナイフを完成させた時の、何物にも代えがたい達成感、経験した者でなければ味わえない。

また、一般のファンが、趣味のひとつとしてナイフを作る場合、いつまでに完成させなければならぬという、時間の制約はない。疑問がわいたら、充分の間を空けて考え、納得のゆく答えが出てから先に進めば良い。ゴールを見上げながら、立ち止まってあれこれ考えるのも、ナイフそのものを知る上で、大きなメリットになるはずだ。

カスタム・ナイフは、デザインから仕上げまでを自分自身でこなすナイフのことだ。従って、まず最初に、どんなナイフを作るのかを、決めなければならぬ。もちろん、マスプロのモデルや、プロのメイカーが製作したモデルを参考にしたり、コピーしたりしても構わない。しかし、せっかくならば苦労して作るのだから、できれば自分自身でデザインしたナイフを作る方が良いでしょう。法規制の範囲内で作る限り、どんなナイフでも作る事ができるのだから、自分が理想とするナイフを思い浮かべ、デザインにまとめて行く。自らがデザインし、自らの手で作ったナイフならば、達成感も一層大きくなる。

ただし、描いたデザインで、すぐに作り始めると、作りながらいろいろ変更しなくなることも多い。イメージが先行すること、加工が難しい、あるいは加工できないという部分が出てくることもある。描いたデザインは、しばらく壁などに貼って眺め、バランスやシルエットを十分に検討し、できれば製作の手順なども考え合わせて、修正を重ねて行く。

「手直しするべき部分はない」と、思える状態になってから、製作に入るのが成功への近道でもある。

一本だけでナイフ・メイキングをやめてしまう人は、実は少ない。最初の一本で、作ることに面白さを知り、次はこんなナイフを作ってみようという風に、興味や欲求がどんどん膨らんでいくはずだ。製作本数が増え、自信が付いてきたら、作るナイフのハードルや課題を徐々に上げることも、ナイフを作る楽しみのひとつだ。

ひとつだ。

私の場合、カスタマーの無理とも思える注文を、試行錯誤の末にこなした時の喜びは極めて大きい。新しい技術や知識、そして自信は、そういう時にこそ得られるものだ。常に自分を超越して行かないと、行き詰まることにもなる。たとえ趣味で作る場合でも、少しずつ進歩していくところに、大きな満足感があり、ナイフ作りもより楽しくなっていく。

高度なナイフ作りや、プロのメイカー

### ニューヨーク・スペシャル NEW YORK SPECIAL

全長182mm、ブレード長83mm、ブレード材ステライト6K、ハンドル材アイボリー・パーク(アイボリーの表皮部分)。

R.W.ラブレスの希少モデルをヒルトレス・タイプで再現した相田義人さんのコレクション・モデル。ハンドルのフィット感はラブレス・ボルト。ワッシャーはオリジナル通りのプラスチックだが、ボルトはステンレスを使用している。シースは、品質の高さに定評のあるイタリアのレザーを使用。ラブレスのムードを受け継ぎつつ、コレクション・ナイフであることを考慮した素材構成で作られている。



を目指すのであれば、ナイフ・ショーに参加してみよう。ナイフを作る仲間を増やし、様々な情報を交換するなど、ナイフを通して大区の人と交流を図れることもナイフ作りの楽しみのひとつ。自分が作ったナイフの評価を聞き、他のメイカーの作品を見ることの出来る良い機会でもある。ナイフ・メイキングは、自分自身ですべてをこなすことが原則だが、それを決して孤独な趣味にしてはいけないと思う。

自らの手で作ったナイフを、日常生活や他の趣味で、実際に使ってみるのも、なかなか楽しいことだ。

ナイフは、ハサミや包丁の様な、専用の刃物ではなく、色々な用途を幅広くこなす多目的刃物である。それ故に、専用の刃物に比べて使いにくい、理不尽な刃物だと感じることも多いだろう。しかし、理不尽な刃物であるナイフが一本あれば、「切る」というカテゴリーの殆どをこなすことが出来る。

ナイフを楽しむということは言い換えればナイフの理不尽さを楽しむことだと思ふ。目の前の目的をクリアするため、ナイフをどう使えば良いのか。それを使いこなす技術や知恵を身に付けて行くのも、ナイフの良いところ。自分で作り、自分で使うことで、ナイフという道具が、どこまでも身近な存在に存在になって行くだろう。

最後に、ナイフ・メイキングに限らず、物作りは、誤差の上に成り立っているのだということ、覚えていてほしい。初めてナイフを作るのであれば、なおさら。少々の失敗などは気にしないで、ナイフを作っていくという行為そのものを楽しむ気持ちでスタートすることをお勧めする。

【仕事の数だけ道具がある】

# はたらく刃物

文：かくまつとむ／写真：大橋弘

## 当世木工家具屋事情

小津安二郎の映画を見るとわかるが、かつて日本の庶民の家具は小さな袱台と茶筆筒くらいだった。この風景が急速に変わるの高度経済成長期以降。新築ブームによって置かない洋間が流行。そこに納まったのがテーブルだった。それから半世紀。日本の家具は日々進化するとともに、よい意味で成熟した時代に入っている。

### 都心にある家具製作所

オーダー家具というものが注目を集めたのは昭和も末に近づいてからだったと思う。ナチュラルという言葉が定着したものもこの頃だ。人工物にあふれた暮らしの中で、せめてテーブルと椅子ぐらいは自然を実感できるものがほしい。使い捨ての暮らしから卒業し、100年かけて育った木で作った家具を100年使い続けよう——。今でいうサステイナブルな暮らしへのメッセージを、作り手自身が発信する時代になった。こうした考え方は社会の雰囲気も少しずつ変えた。たとえば無印良品などはナチュラル&シンプルという志向をうまく汲み上げブランド化し

ている。この種のムード醸成を待つて上陸したのが北欧家具のイケアだし、ニトリや大塚家具のような総合家具店が扱う商品のセンスも、ひところよりナチュラル寄りだ。

家具をめぐる潮流は今も静かに変化し続けている。J.R山手線の御徒町駅から程近い家具屋「ウッドワーク」の母体は、明治30年創業の材木商、下甚商店だ。下甚は業界でも異色で知られた会社で、木を仕入れて売るだけでなく自らが製作部門を持っていた。たとえば歌舞伎座や国立劇場、これらの檜舞台や大道具を一手に引き受けてきた。ウッドワークは、そのDNAを受け継ぐ形で今から10年前に誕生した。

1階は店舗で、地下が工房。希望があれば家具を作る様子を見学することもできる。木の香りやモノづくりの空気を肌で実感できる、今の都心では珍しいスペースといえよう。仕事の多くを占めるのは注文家具で、なかでもマンション暮らしに合わせた設計を得意とする。たとえば、家族の形態は歳月とともに変わる。はじめは夫婦だけだが、子供が誕生し、また一人生まれ、育っていく。椅子が増えテーブルが大きくなる。だが20年もたつと子供たちは巣立ち、テーブルを囲むのは再び夫婦だけになる。



鈴木さんの鉋。右は前の職場の親方から15年前にもらったという鉋。ずいぶん研ぎ減っている。

ウッドワーク製品の中でも人気があるというオルタナティブテーブルは、ときどきの生活環境やライフスタイルに合わせて、天板の素材や形、脚の高さを自由に作り替えていくことができる生涯設計のテーブルだ。とかく重厚になりがちな脚部を金属にしたハイブリッド型の家具で、軽くシルエットもシャープ。それでいて天然の無垢材特有の温かさは微塵も失われていない。住空間を支配し続ける家具でなく、人生の節目に合わせて新陳代謝を重ねていく家具というのがコンセプトである。

### 職人は「刃物を使わない世代」

みずみずしい感覚は、デザインだけではなかった。代表の藤本雅也さんをはじめ、スタッフ全員が30代以下と若い。製作を担当するのは鈴木亮佑さんと直井宏樹さん。ともに木とは関係のない環境で生まれ育ったが、職人という生き方に惹かれて家具の世界に飛び込んだという。

時代の違いを感じるの、彼らの